

(続紙1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	望月 葵
論文題目	シリア難民の生成と「異邦」における再定住 —祖国喪失後の生存基盤と帰属をめぐる中東と欧州の事例—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、中東地域研究と持続型生存基盤論の方法論に基づいて、中東地域およびヨーロッパ地域を対象とする地域越境的な視座から、2011年以降のシリア難民問題についてシリア難民の生存基盤がどのように再構築されているのかについて、彼らの持つ帰属（belongingness）に着目して考察を行ったものである。本論文では、ヨルダン、ドイツおよびスウェーデンの事例が中心的に取り上げられている。</p> <p>本論文は以下の3点を目的として設定している。第1に、難民研究の視座から、シリア難民問題を地域横断的な問題として捉え、各難民受け入れ国の国家としての存立基盤とシリア難民受け入れ政策の差異について比較することで、各国の難民問題に対する地域性を明らかにする点、第2に、中東地域研究の観点から、近代以降に中東地域において築かれた国民国家体制が、難民問題とどのように関連しているのかについて難民流出国であるシリアと難民受け入れ国であるヨルダン、ドイツ、スウェーデンの両側面から解明する点、第3に、持続型生存基盤論の一環として、シリア難民が受け入れ社会とどのような関わりを持ち、自身の生存基盤を再構築しているのか、シリア難民の帰属に着目して明らかにする点である。</p> <p>第1章では、本論文の前提となる難民の法的定義について確認し、実務上の観点からその定義が拡大解釈されていった背景が説明されている。また、国際難民レジームが形成された歴史的過程について論じられており、中東地域においては多くの国が難民条約について未批准であり、地域的な難民保護のコンセンサスが不在であることが指摘され、難民の帰属に着目することの重要性が論じられている。</p> <p>第2章では、シリア難民問題の発生国であるシリア・アラブ共和国の国民国家形成過程が論じられている。具体的には、シリア難民問題の原因となったシリア内戦に至るまでの現代シリアの歴史を、シリアの独立期、権力闘争期、ハーフィズ・アサド政権期、バッシャール・アサド政権期の4つの時代に区分し、現代シリアを西洋列強によって分割されたことで誕生した人工的で擬制的な国民国家だと結論づけている。</p> <p>第3章では、シリア隣国のヨルダンにおけるシリア難民問題の実態が取り上げられている。そこでは、ヨルダン社会の有するホスピタリティーに着目して、政府の難民政策という政治的側面と、実際のシリア難民の生活という社会的側面に焦点を当てた分析が展開されている。</p> <p>第4章では、ヨーロッパの主要な移民国家であるイギリス、フランス、オランダ、ドイツ、スウェーデンを取り上げ、各国の国家の性質と移民・難民政策の類型化が行わ</p>			

れている。特に、移民・難民政策の類似性が指摘されるドイツとスウェーデンについて、そうした政策に影響を及ぼしている福祉レジームなどの国家の性質としての差異が存在することが指摘されている。

第5章では、ドイツとスウェーデンの難民政策の変遷とシリア難民問題への対応が取り上げられている。特に、2015年秋以降、これまで寛容な対応を見せてきた両国のシリア難民政策が国内の反発などを受けて次第に制限的なものへと変化していった過程と、市民社会レベルでのシリア難民包摂の試みや難民の帰属を活用する萌芽的プロジェクトについて考察が行われている。

結論では、以上の内容から全体を総括している。